

高温の環境に順応する働きをする特定の遺伝子が、線虫とアブラナ科の雑草の双方にあることを発見したと、甲南大（神戸市東灘区）などの研究チームが発表した。同様の働きをする同一の遺伝子を、動植物が共有しているのが判明するのは例が少なく、チームは「この遺伝子に絞って品種改良を進めることができれば、地球温暖化による食料危機への貢献が期待できる」としている。

甲南大などのチーム発見

農作物と家畜、品種改良に期待

甲南大理工学部の久原篤教授（生体調節学）＝写真＝らのチームは、アブラナ科の雑草「シロイヌナズナ」と、体長1ミリの程度の線虫「C. エレガンス」の遺伝子を解析。その結果、C. エレガンスが高温環境で生存する際に働く遺伝子「emb-4」とシロイヌナズナの同様の遺伝子「LHT1」が同一であることが、生み出されるタンパク質の類似性から判明した。

久原教授は「これらの遺伝子に絞った品種改良で、いずれも暑さに強い農作物と家畜を生み出せる可能性がある」と話している。



（井原尚基）

動植物共有高温順応の遺伝子